



部会通信 第4回

若手生産者の挑戦！ 「ファイトリッチ」シリーズを全国展開へ！ 矢野正敏さんの「弁天丸」 「コーラルリーフ」「紅法師」「オレンジ千果」

新型コロナウイルスの感染拡大は、「ファイトリッチ」部会にも確実に影響を及ぼしました。スーパーでの販売は好調ですが、飲食店向けは大きな打撃を受け、先の見えない状況が続いています。しかし、部会の方々は変わらず生産に注力する日々。今回はその中から、ホウレンソウ「弁天丸」やミニトマト「オレンジ千果」などを栽培する、矢野正敏さんをご紹介します。

(編集部)

売る側から作る側へ

矢野正敏さんは現在30歳。若手の多い「ファイトリッチ」部会の中でも、最年少の生産者です。実家はメロン農家ですが、特に継ぐ気もなく、大学卒業後はスーパーに勤務していました。し



↑会社員から農家に転身。矢野さんは一人で4棟のハウスを回す、めまぐるしい日々を送る。

かし、業務で野菜を扱い、生産者と接するうち「栽培への興味がわいてきた」と言います。おもしろそうだし、考えれば自分には作る環境もある。なら売る側ではなく作る側に回りたい。そして入社から5年後、矢野さんは退職し、就農する道を選んだのでした。

ただ、家業のメロン栽培を手伝おうとは考えませんでした。作りたかったのはあくまで常用野菜。そこで、農家を育成する研修施設で2年、続いて企業で1年、栽培を基礎から勉強。その学んだ企業というのが、「ファイトリッチ」部会のメンバーでもあるワタミファームでした。ここで矢野さんは、「ファイトリッチ」シリーズを京丹後の新たな特産とすべく奮闘する、株式会社田園紳士の森下裕之社長を知り、その

生産にも携わることになったのです。

始まりは「オレンジ千果」

昨年の4月、矢野さんは念願の独立を果たしました。2カ所に土地を借り、ハウスを計4棟建てて生産開始。小高い山の上の3棟では研修で慣れた葉物を、平地の1棟では作りたかったトマトを計画。その中で森下社長からリクエストされたのが、ミニトマト「オレンジ千果」でした。大玉より栽培しやすく、経験が少なくてもよいものがあるから。ただ、実際に栽培を始めてみると、規模の大きい葉物に手がとられ、離れたトマトのハウスはおろそかになりがち。わき芽とりが遅れてジャングル化してしまふなど、なかなか管理が行き届きません。勉強にと大玉品種の袋栽培もしてみましたが、尻腐れが出て育たず、難しさを実感しました。

とはいえ、試行錯誤の中でも、とれた「オレンジ千果」は甘く、おいしいと思えるできばえ。栽培も冬手前の11月まで続けられ、課題はありつつやっていけそうな気配も見えてきていました。

葉物への拡大

昨年の10月から、矢野さんは新たな

「ファイトリッチ」品種を取り入れました。まずはカラシナ「コーラルリーフ」とミズナ「紅法師」、そして今年の春にはホウレンソウ「弁天丸」を追加。森下社長と相談し、葉物で安定した需要が見込めるもの、出荷先の店舗に入れやすいものを選びました。

ただ、ある程度慣れた葉物でも、すべて一人で栽培するとなると話は別。決められた時期に決められた量を出荷するのは、案外大変なことでした。もちろん、注文に応じてちゃんと納められるよう、播種時期を設定したはずなのに、天候で生育が足りなかったり、逆に進みすぎたり、なかなか予定通りにはいきません。数がそろわず、「すみません」と頭を下げることもしばしば。少しずつ慣れはしましたが、継続して出し続けるには読めない部分があると感じています。

夏季の難しさ

それでも、導入時の10月は適期とあって、困難はなかったのですが、雪どけ後に栽培を再開し、日長が長くなる新たな課題が降りかかりました。

葉物の場合、春から夏にかけては、どうしてもトウ立ちの問題がつきまといまふ。「弁天丸」も収穫前には一気に生育が進むため、わずかな遅れが命と



とは？ タキイ種苗が開発した、機能性成分を豊富に含むおいしい健康野菜シリーズです。



↑「紅法師」はこれで播種から30日。夏場はあっという間に大きくなる。



←播種から20日後の「弁天丸」。ここから生育が加速し、春から日長が長くなる中では、時期を逃すとトウ立ちの危険性がある。

「ファイトリッチ」ココをひと押し!

生食にも使える「弁天丸」

甘みのある「弁天丸」は多彩な売り方のできる品種ですが、それを可能にするのが矢野さんの栽培です。化成肥料を使わず、どの季節でもえぐみが少ないため、サラダ商材としても十分通用するクオリティに仕上がっています。



↑最初に取り組んだ「ファイトリッチ」野菜が「オレンジ千果」。

り。前日なら出荷できたのに1日待ったがためにトウ立ちし、捨てるはめになったのは一度や二度ではありません。さらに「コーラルリーフ」は高温下だと色づきにくいのも難点です。対策は水をやりすぎないこと、遮光しすぎないことですが、かといって日に当てすぎるとかたくなるため細かな調整が必要になります。また、「紅法師」は気を抜くとすぐ大きくなり、出荷基準から外れてしまいます。

メインは「弁天丸」に

害虫の被害も多い時期で、特にアブラムシとネキリムシが多発。農薬を控えるため、矢野さんは最も効果的な播種時に絞って薬剤防除を行っています。これを怠ったがためにネキリムシにやられてしまったこともありました。

レベルアップするには

4棟のハウスのタネまきから肥培管理、収穫、袋詰めまで一人で行うのはかなり大変。こだわりたい部分があっても、現状では手が回りません。

それでも「全部自分で決めて、自分でやるのは楽しいですね」と、矢野さんは充実感をにじませます。実際にやってみて、露地の大規模栽培より、ハウスの限られた面積で丁寧にする方が向いていると実感。何時間でも飽きずに作業していられるといいます。

改善したいのは、まず廃棄を減らすこと。どのタイミングでトウ立ちするか、または大きくなりすぎるかを見極めて、直前にとる。その勘をもっと養わねばなりません。ハウスの土も、場所によってはかたかったり、水もちが悪かったりします。堆肥を施して改良すればもっとよいものがとれるはず。一つずつ課題を解決し、ハウスをきっちり回せるようになれば、安定生産にもつながられます。

森下社長も、矢野さんの若さに大きな期待を寄せます。さしあたっては、

袋詰めせずにコンテナで出せるような出荷先を紹介し、省力化の助けになればと考えています。その分栽培に注力して増産できるようにすれば、社長からの注文も増やせます。

また、「ファイトリッチ」部会でも活躍してほしいと、次の部会長には矢野さんに就任してもらおうことに。部会員同士の横のつながりが強められれば、矢野さんも得るものは多いはず。

矢野さんには、やりたいことが多くあります。「ファイトリッチ」シリーズに薬物の新品種が加われば挑戦したいし、トマトだってもっと勉強したい。レベルを上げて、ゆくゆくは規模を拡大したい。全国の方に「買ってくださーい!」と言えるようになるため、今日もハウスで黙々と作業を続けています。



↑森下社長(左)も若い矢野さんを次期部会長として期待する。